

奨励賞

私の一步

伊勢原市立山王中学校 3年 きし ももか 岸 桃花

不登校、どこか他人ごとだと思っていた。まさか自分が学校に行かれなくなるとは思ってもみなかった。

中学二年の秋、私の体はおかしくなった。夜眠れない、朝起きれない。無理に起きようとすると激しい頭痛と吐き気に襲われた。はじめは数日おきだったものが、日に日に症状は進み、とうとう学校に行かれなくなってしまった。身体の不調と同時に、家族との関係も悪くなっていった。学校に行かずに昼過ぎまで寝ているなんて、はたから見ればただのさぼりにしか見えなかったのだろう。なにしろ夕方になれば元気になり、何もなかったようにけろりとしているのだから。顔を合わせると小言を言われるのがうっとうしくて、自分の部屋にこもる事が多くなった。思い通りにならない身体にイライラして家族に当たってしまう自分の不甲斐なさに、気分はどんどん沈んでいった。見かねた母に連れて行かれた病院で「起立性低血圧症」と診断を受けた。なぜかほっとした自分がいた。私はダメな人間じゃなかったんだと。帰りの車中で「つらかったんだね。ごめんね。」と言う母の言葉に涙がこぼれそうになった。しかし本当に苦しいのはそれからだった。ますます症状は悪化する一方だったのだ。学校の事を考えると、「もう授業についていけないだろう」とか「クラスに居場所はないのでは？」という思いがうかび不安で押しつぶされそうになり、ますます眠れない夜が続いた。朝が来ると起きなくてはと思う心の影に「私は病気なのだから仕方ないじゃないか」という考えがよぎるようになった。それは私の甘え、心の弱さだろう。その考えはま

るで悪魔のささやきのように私の心を支配していった。具合が悪いから…、病気だから…、そう言って面倒な事から逃げて楽をする毎日だった。でもそんな時には「本当にこのままでいいの？」と自問する自分もいた。そんな私の背中を押してくれたのは、私を心配し見守ってくれていた人達だった。毎晩家に電話をくれた担任の先生、困った時に駆けこめる場所をくれた保健室の先生、そして眠れない私に付き合っ、夜中まで一緒にいてくれた両親。不安な気持ちで足を踏み入れた教室には、駆け寄ってきて抱きしめてくれる友人がいた。がんばってみようと思えた。

先日新聞で、夏休み明け近くは子供の自殺が多くなるというショッキングな記事を読んだ。不登校から抜け出すために、私は前に進む一步を選んだ。だが時には他の選択肢もあるはずだ。別の道に向かって進む一步、その場で足踏みする一步、一旦後ろに下がる一步。どの一步も決して間違いではないと私は思う。そしてどの一步も命あってこそその一步であろう。私達は一人ではない。必ずどこかに手を差し伸べてくれる人がいる。時には誰かの手を借りたっていい。自分なりの歩幅でゆっくり一歩ずつ踏みしめて生きていこう。勇気を持って踏み出した一步は、未来への道に続くはずだから。